

第1章 序論

A. 研究の背景

現在インドネシアでは日本語が多く学ばれている外国語の一つになってきている。それは日本語教育や日本文化や日本文学などに焦点を当てている日本語プログラムを行っている多くの学校や大学などの数から見る事ができる。そんな学校や大学などの数が多くなったのは毎年日本語に興味のある人が増加しているからである。その理由は学校や大学などの教師および日本会社の会社員としての職業ニーズが増加しているからである。

日本語学習者は学校や大学などで何か教えてもらったことを仕事の世界で適用することができるようになると期待するかもしれない。しかし、学校や大学などで教えてもらったのは常に仕事の世界で現れたことと同じではないという現象が現れることもある。その問題は日本語学習者のニーズを満たすために日本語教師や日本語研究者などの仕事の一つになっている。

学校や大学などで教えてもらった日本語と仕事の世界で使用している日本語の間に不一致現象は様々なことに現れることができる。その一つは日本人と話している時に日本語の表現の使用のことである。日本語の表現は様々であるが、大学などで教えてもらったのと実際の日常会話で使用されるのと少し違うことがあるのは可能表現である。

日本語の可能表現は「～ことができる」型や動詞の可能形などで表現することができる。動詞の可能形あるいは「可能形」であるのは日本語の動詞の活用に含まれている。それは可能の意味をもち、何かをする能力あるいは状況を表すために使用される動詞の活用形である。つまり、その形はインドネシア語では「*bentuk dapat*」と呼ばれる。

辞書形から可能形に活用は文法的に動詞の種類によって違うのである。すなわち五段動詞、一段動詞、および変格動詞あるいは不規則動詞がある。東中川・東雲（1996）は次のように「可能形」の作り方について述べている。五段動詞は「ウ段」を「エ段」にかえ、「る」をつける。一段動詞および不規則動詞「くる」は「ない形」の「たべない」「こない」の「ない」にかえ、助動詞「られる」をつける。不規則動詞「する」は意味上、「できる」とするが、「失望する」のような無意志動詞は「できる」とはならない。例としては次のように動詞の活用形を見てみよう。

1. 五段動詞：「買う→買える」、「書く→書ける」、「話す→話せる」。
2. 一段動詞：「見る→見られる」、「寝る→寝られる」、「食べる→食べられる」。
3. 不規則動詞：「来る→来られる」、「勉強する→勉強できる」。

これらは文法的に正しいルールであるが、実際の会話では日本人（特に若者）はそのルールに合っていない可能形を使用することが多い。例とし

ては可能形の「食べられる」はその音節「ら」を抜き、「食べれる」になったのである。このような現象はいわゆる「ら抜き言葉」と呼ばれる。

その「ら抜き言葉」の存在は日本語学習者にとって当惑させる可能性をもっている。なぜかという、それは大学などの日本語学習者が可能形を教えてもらったのは実際の日常会話で日本人が使用する可能形と差をもっているからである。「ら抜き言葉」の存在およびその使用のルールが分からない学習者にとっては日本語で話す場合、誤用が起こる可能性を持っていると考えられる。

したがって、日本語学習者に対して可能形の使用に誤用が起こらないように、可能形の「ら抜き言葉」については形態的および意味的のどのようなルールがあるかを明らかにする研究が必要になると考えられる。

以上のような背景に基づいて、筆者は【日本ドラマの会話における「ら抜き言葉」に関する形態意味分析】という題名で研究をしたい。

B. 研究問題の設定

本研究では、問題の設定が二つに分けられ、すなわち一般的な問題および具体的な問題がある。一般的には『「ら抜き言葉」は可能表現として、その形態および意味によってどのように使用するか』という問題である。本研究の問題は具体的に次のようである。

1. 日本のドラマの会話における「ら抜き言葉」に活用できる動詞は何の動詞か。
2. 形態的には、その「ら抜き言葉」に活用できる動詞はどのような動詞か。
3. 意味的には、その「ら抜き言葉」に活用できる動詞はどのような動詞か。

という三つの問題に対して答えを探した。

C. 研究の範囲

本研究の対象以外に広がらないように、研究の範囲が必要になった。本研究の範囲は次のようである。

1. 本研究は日本ドラマの会話における可能表現としての「ら抜き言葉」に関する分析に焦点を当てている。
2. 本研究は形態的に「ら抜き言葉」に関する分析に限定された。
3. 本研究は意味的に「ら抜き言葉」に関する分析に限定された。

D. 研究の目的

本研究は、一般的には日本語学習者に対して、日本語の可能表現としての「ら抜き言葉」の使用を明らかにすることを目的とする。それに、具体的には次のような目的をもっている。

1. 「ら抜き言葉」に活用できる動詞は何の動詞かを分析するためである。
2. 形態的にその「ら抜き言葉」に活用できるのはどのような動詞かを分析するためである。
3. 意味的にその「ら抜き言葉」に活用できるのはどのような動詞かを分析するためである。

E. 研究の意義

本研究の意義は理論的に日本語学に対する貢献することができる。特にこの「ら抜き言葉」の存在は可能形や受身形などの「～られる」型を簡単に区別できるようになると思われる。また、本研究は実用的に日本語教育に対する、次のように貢献することができると考えられる。

1. 日本語学習者にとっては、可能形のことを、特に「ら抜き言葉」の使用について理解できるようになると思われる。
2. 日本語教師にとっては、学生に可能形のことを教えてあげる場合は文法的に正しいものだけでなく、実際の日常会話に現れるものを教えてあげることができるようになると思われる。
3. 日本語研究者にとっては、次回の「ら抜き言葉」などについての研究のために参考になると思われる。

F. 研究の方法

本研究は記述分析法および定性アプローチを使用した。記述分析とはデータを収集、分類、解釈するという仕方である。その方法を使用した理由は実際の現象によって本研究の対象の状態を描写するために適当な方法であるからと思われる。また、本研究で定性アプローチを使用した理由は本研究のデータが定性的な解釈を掛かる事例の文であるからと思われる。

本研究のデータの出典は 2005–2012 年にリリースされた日本のドラマである。サンプルになったドラマの数が 15 タイトルである。そして、本研究の対象はそのドラマにおける「ら抜き言葉」を使用している会話文である。

本研究のデータ収集の技法はトランスクリプション技法を使用した。その技法はデータフォーマットに「ら抜き言葉」を使用している会話文を記録する仕方である。日本ドラマからのデータを収集に使用された。その後、データを分類、データ分析の技法で分析した。

本研究のデータ分析技法は UCA 技法および文脈によって分析技法を使用した。UCA 技法は形態的に「ら抜き言葉」を分析に使用されたが、文脈によって分析技法は意味的にその「ら抜き言葉」を分析に使用された。その後、分析の結果から結論を出すことができた。

G. 研究論文の構成

本研究論文は次のような構成で成り立っている。

1. 第1章 序論

この章は研究の背景、研究問題の設定、研究の範囲、研究の目的、研究の意義、研究の方法（一般的に）、および研究論文である部分で成り立っている。

2. 第2章 基礎的理論

この章は可能表現、可能表現の形、可能表現の意味、ら抜き言葉などの理論に関する説明である部分で成り立っている。

3. 第3章 研究の方法

この章は研究の種類、研究の方法、データの出典、研究の対象、研究の道具、データ収集技法、およびデータ分析技法である部分で成り立っている。

4. 第4章 データ分析およびその解釈

この章は得られたデータのデスクリプション、そのデータの分析、およびそのデータの解釈を提示している。

5. 第5章 結論および今後の課題

この章は分析の結果によって結論の提出および研究結果からインプリケーションとしての今後の課題を提示している。

